

フィールドワーク教育って

なんだ？

TELL ME WHAT
FIELDWORK EDUCATION LOOKS LIKE.

公開シンポジウム

北九州市立大学
受講無料
高校生・大学生
歓迎

公開シンポジウム 2016年11月11日(祝) 10:00~17:00

北九州市立大学 北方キャンパス本館 A101 教室 (定員 500 名) 【共同主催】 濫澤民族学振興基金 『「大学教育とフィールドワーク」に関する実践経験交流と教材開発』 ◆ 日本文化人類学会課題研究懇談会 『応答の人類学』 ◆ 北九州市立大学 『動物のみかた』 『人類学概論／文化人類学』 特別講演 ◆ 九州人類学研究会 ◆

新しい教育改革の潮流と、フィールドからの学び

近年の国際化と急速な社会変化に対応するために、大幅な教育の見直しが検討されている。それは従来のような「何を教えるか」という知識の質や量の改善にとどまらず、「どのよう

に学ぶか」という学びの質や深まりに注目した新しい教育改革の流れである。

学校教育法には学力の三要素として「基礎的な知識及び技能」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」が示されている。従来型の系統学習がこのひとつの要素であるとするならば、後者のふたつの要素が新しい改革の柱である。文科省の中教審答申

においても、問題解決型学習(PBL)やアクティブラーニング(AL)など、課題の発見と解決に向け主体的・協働的に学ぶ学習プロセスへの重点化が随所にうたわれている。

これらいわゆる21世紀型スキルは、初等教育から高等教育にいたるそれぞれのプロセスで達成すべき課題として学習指導要領に明示され、とくに高等教育ではグローバル人材育成や環境教育、持続発展教育(ESD)など、新しい社会変化に対応する教育課題への応用が期待されている。

しかし一方で、こうした教育は従来型の多人数で座学中心の教授方法では難しいとされ、多様な状況に即した実践的な学習をどのように進め

ていくのかを、教育現場が模索している現状がある。

さて、これら実践教育のコアとなっているのがフィールドワークである。本シンポジウムでは、これまで一〇年以上にわたり環境教育・技能習得・社会実践・調査研究における分野で数多くの成果を積み上げてきた四名の話者が、「フィールドからの学びはフィールドワーク教育になり得るのか」という視点から、現状に対する批判も含めて、それぞれの活動の背景や実践成果、そしてその可能性について議論する。

井上は、プログラム化された既存の環境教育に対する違和感をもとに、予想外の発見がもたらす自然の楽しみ、さらに活動を通じた社会との関わりについて語る。

命婦は、子育て世代の社会的スキルの希薄さを改善するために、日常的な場を用いたコミュニケーションを通して親子が状況的に人間関係を学んでいく新しい社会的スキルトレーニング(SST)を提案する。

木下は、市場における店舗運営実践を通じた学生たちの知識習得の型を検討し、社会が用意するシナリオと自発的なアドリブとのせめぎ合いの妙味について語る。

竹川は、正統的周辺参加(LPP)の観点から教師の役割として「教えないこと」と「舞台を用意すること」の二点を指摘し、学びにおける個性と創造性の源泉を明らかにする。

さらに総合討論では、研究や教育の枠を越えた多分野のディスカッションからの問題提起と白熱議論を用

意している。

現在、全国の大学をはじめ多くの教育機関が制度改革を模索している。しかし、皮肉なことに、制度側が目的を設定し手取り足取り準備すればするほど、学びの能動性は失われ、本来の趣旨から乖離していく実態がある。数値目標や参加型評価など安易な方法論に陥ることなく、成果をあげるための実践(学習)とそれを可能にする制度(教育)との距離を真剣に検討する必要があるだろう。

フィールドワーク教育としてのノウハウがあるとすれば、それはどこにあるのか。そうした問いを通して、このシンポジウムのすべての参加者に「誰かに与えられる教育ではなく、自分から求める学び」の一端を感じて欲しいと願っている。

Program



2016年 **1月11日(祝)** 10:00~17:00

10:00-10:40 環境教育再考

井上大輔 ◆ 生きもの好きが発信する魚部という「場」

10:40-11:00 問題提起 1

上野 由里代 ◆ 岩野 俊郎 ◆ 松田 凡

11:00-11:40 第3のSST

命婦恭子 ◆ 市場から人付き合いを学ぶ「たんたんマルシェ」

11:40-12:00 問題提起 2

伊藤 泰信 ◆ 眞鍋 和博 ◆ 辻利之

12:00-13:30 昼休み

ミツバチの巣箱視察

13:30-14:10 市場のテクネー

木下靖子 ◆ 「大學堂」の実践にみられるシナリオとアドリブ

14:10-14:30 問題提起 3

古藤 あずさ ◆ 内藤 直樹 ◆ 松田 幸三

14:30-15:10 野研という可能性

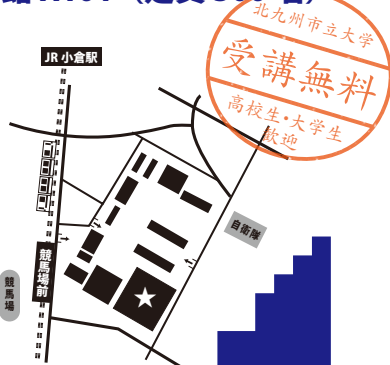
竹川大介 ◆ 正統的周辺参加によるスキルからアートへ

15:10-15:30 問題提起 4

片岡 寛之 ◆ 久間 直樹 ◆ 瀬瀬 あや

15:30-17:00 総合討論

北九州市立大学北方キャンパス
本館 A101 (定員 500名)



受講は無料です。

高校生・大学生・教員・興味がある市民の皆様
どなたでも聴講いただけます。

申し込みは不要ですが、資料作成の都合上、
事前にご連絡いただくと幸いです。

演題の一部聴講や途中入室も可能です。
会場へは公共交通機関をご利用下さい。

【問合先】

竹川大介研究室
daisuke@apa-apa.net
093-964-4167

公開シンポジウム
FIELDWORK EDUCATION LOOKS LIKE...
フィールドワーク教育ってなんだ?

10:00-10:40 環境教育再考 生きもの好きが発信する魚部という「場」

10:40-11:00 問題提起 1

井上大輔

県立高校の国語科教諭。1998年に部活動の「魚部」を始める。地域の自然調査の成果をもとに水環境館や自然史博物館で展示をおこない『紫川大図鑑』などの著書を編集出版。2015年度から市内に拠点をつくり「だれでも参加できる新しい魚部」をスタートさせた。これら魚部での活動を通じた自然環境への関わり方を研究し博士論文にまとめるため、北九州市立大学大学院社会システム研究科博士後期課程に在籍中。



上野 由里代

魚部 副代表 (高校魚部 OG)。福岡工業大学 社会環境学部の一年生で、ピオトープ研究会に所属。魚部でゲンゴロウやガムシなどの水生昆虫と出会い、人生が変わった。世界でただ一人の「水生昆虫伝道師」となるべく、現在は各地の水辺で武者修行の日々を楽しんでいる。また、「イケメンよりゲンゴロウ」をテーマに掲げて、水生昆虫の展示や講演会などの普及活動にも精力的に取り組んでいる。



岩野 俊郎

日本獣医畜産大学の獣医学科卒業。以来津遊園、到津の森公園に勤務。獣医らしいことも園長らしいこともしたくない。最近はイルカ問題やマレーグマ、ゾウ問題など頻発し、「このままでいいのか！動物園！」。日本の動物園の新しい姿を探りつつ前進しようと思っている(あくまでも思っている段階) 9 地方動物園の園長。「国立動物園を考える会」副代表！



松田 凡

1958年生。京都文教大学教授。専門は文化人類学、アフリカ地域研究。京都の里山育ち、エチオピアでも川沿いの村に滞在すること数年、現在は滋賀県に住んで、やはり琵琶湖周辺の水環境と人の暮らしに関心を持つ。学生を連れてアフリカへ行くこと 10 年、フィールドで学生が育つ姿をいつも頭に描きつつ、教育とは何かを考える。

11:00-11:40 第3の SST 市場から人付き合いを学ぶ「たんたんマルシェ」

11:40-12:00 問題提起 2

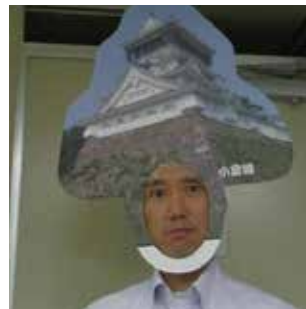
命婦恭子

西南学院大学短期大学部保育科准教授。公立小中学校スクールカウンセラーを兼任。臨床心理士。大学教員として 2005 年より臨床心理学科、2012 年より児童教育学科に勤務し、就学前の子どもたちや子育て中の保護者と接する機会が増えた。児童生徒の心の問題に対応していく中で、就学前の経験の重要性を感じている。2014年に現職に就くにともない北九州市へ赴任、親子参加型の SST を開発し実施している。



伊藤 泰信

北陸先端科学技術大学院大学 (JAIST) 准教授。英国ロンドン大学 UCL 客員研究員。文化人類学者。文化的主権回復運動を先鋭的に展開しているニュージーランドの先住民マオリをめぐる知と社会の動態についての研究に従事してきた。近年は、文化人類学のフィールド調査手法であるエスノグラフィを介して、医療やビジネスの現場の実務者らと協働する研究実践に力を入れている。石川 (本校) と東京 (サテライト) を年間数十回往復しつつ、社会人大学院の学生教育にも力を注ぐ。



眞鍋 和博

リクルート出身。キャリアセンター専任教員を経て 2009 年から地域創生学群専任。PBL や SL を地域で展開するためのコーディネーターや学生指導を行う。また、同大学地域共生教育センター長や魚町商店街内にキャンパスを設置した市内 10 大学連携の北九州まなびと ESD ステーション事業責任者も務める。計約 60 プロジェクト、1,000 名の学生が北九州地域での実践的な地域課題解決活動を常時展開している。We Love 小倉協議会副会長をはじめとして地域での様々な役割も担う。



辻 利之

小倉の街中で生まれ育つ。(現 61 歳) 小倉の中心市街地の活性化に精力的に参加。We Love 小倉協議会 (小倉の情報発信チーム) 会長。京町銀天街協同組合理事長。/ 本業は、日本茶老舗の店主。「スタンスはローカル (小倉) に、ビジョンはグローバルに」をスローガンに掲げ、お茶を使ったデザートを開発する等、茶離れの若者へ日本茶をより身近なものへと、カフェ併設の業態変換。現在積極的に海外展開中。(株) 辻利茶舗 取締役会長「街づくり」と「店づくり」の同時進行の必要性を唱える。



13:30-14:10 市場のテクネー「大學堂」の実践にみられるシナリオとアドリブ

14:10-14:30 問題提起3

木下靖子

専門は人類学。南太平洋のパヌアツ共和国メリック島、フツナ島、沖縄伊良部島、石垣島、瀬戸内海鷓島など、島嶼部をフィールドに、人の移動、旅、自然利用に関する知識のありかたを研究している。2008年にオープンした旦過市場の大學堂を拠点に、行き交うひとびとと交流しながら、研究活動をおこなっている。竹を組んで作る遊動生活型シェルター「スター★ドーム」の棟梁でもある。



古藤 あずさ

島根県松江市出身。大学進学で多くが上京する中ひとり南下し北九州市立大学へ。勉強は机に向かってするものと教えられ、成績至上主義であった。野研と出会い、旅と対話と海山・市場の大学生活を送る。始めは何をしているのかわからず、怪しみながら参加していた活動の意味も、ここにきてようやく見えてきた気がする最終学年。3年次から1年間マレーシアのサラワク大学に留学、帰国前は山奥の先住民の村で1カ月超過です。将来はサラワクの熱帯ジャングルで暮らす予定。



内藤 直樹

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了。博士(地域研究)。東アフリカ牧畜社会を対象に、地域で培われてきた知恵、わざ、価値観等にそくした開発や難民支援に関する研究をおこなってきた。また徳島ではローカルな津波避難支援用具の開発、遺産観光開発による地域づくりや鳥獣害対策のビジネス化を社会調査実習に組み込んだ教育活動をおこなっている。著書に『社会的包摂／排除の人類学：開発・難民・福祉』等がある。



松田 幸三

小倉に住んで5年。ついに大學井評論家の称号を得た。光栄の極みだ。週2回は大學井を食べているだろうか。多くて3回、月にすると10回。丼一杯が200円だから、どんなに頑張っても大學堂への貢献は月2000円程度。一度の飲み代にもならない。だが、ここでの昼食の自身は濃い。市場のおじさんや学生店長とのやりとり、一見客との触れ合い。食べることが何と楽しいかを味わえる空間だ。



14:30-15:10 野研という可能性 正統的周辺参加によるスキルからアートへ

15:10-15:30 問題提起4

竹川 大介

大学では探検部に所属し海や山や海外を歩き、大学院では理学部人類進化論研究室で人類学を学ぶ。学生時代を通して、マンガの連載と出版、コンピュータソフトの開発、シンセサイザー奏者、J R西日本フリーペーパー編集、沖縄石垣島での漁師などを遍歴した。1996年より北九州市立大学に赴任し野研を立ち上げる。大学では太平洋島嶼国でのフィールド研究をもとに「わかるとは何か」について講義をしている。



片岡 寛之

北九州市立大学地域戦略研究所・地域創生学群准教授。(株)北九州家守舎取締役。ゼネコンで2年間の現場管理業務、シンクタンクで6年間の調査業務を経て現職。学生時代に抱いていた、大学での学びと実社会との隔たりへの違和感と、それに対する答えとして、実学重視の想いを胸に、学部運営に携わっている。そして、机上の空論にならぬよう、常に自ら実践し、そこから学習するサイクルを繰り返し、その経験を伝えるよう心がけている。



久間 直樹

RKB毎日放送の「アジア戦略室」兼「北九州支社報道部」部長。報道部に26年間在籍し、05年～08年初めまでTBSソウル支局で特派員として勤務。その間、同乗取材した漁船が沈没するも九死に一生を得る。報道ドキュメンタリーの制作ではパジャワール会の中村哲氏をアフガニスタンで取材。近年では「日章丸事件」の主役で、出光興産の創業者：出光佐三をテーマに取材。この番組では、日本とペルシャ湾を往復するタンカーに1か月半同乗した。



瀬瀬 あや

映画監督。東京生まれ。自由学園卒業後、自分に何ができるのかを模索し続ける中で、写真家・映画監督の本橋成一と出会う。2008年より上関原子力発電所計画に反対し続ける山口県祝島に通いこみ『祝の島』を初監督。2013年には大阪貝塚市の北出精肉店の家族の暮らしを描いた二作目『ある精肉店のはなし』が公開され、文化庁映画賞文化記録映画部門大賞などを受賞。二作とも「暮らし」を映し撮ることをテーマに、自らも現地で長期にわたって住み込みながら映画制作をしている。



魚部って何だ？

どこの誰でも参加できる市民のブカツ的存在「魚部（ぎょぶ）」

～街の名物として思い浮かぶ存在もめざして～

井上 大輔（魚部代表）

■文科省 HP「環境教育」冒頭

現在、温暖化や自然破壊など地球環境の悪化が深刻化し、環境問題への対応が人類の生存と繁栄にとって緊急かつ重要な課題となっています。豊かな自然環境を守り、私たちの子孫に引き継いでいくためには、エネルギーの効率的な利用など環境への負荷が少なく持続可能な社会を構築することが大切です。そのためには、国民が様々な機会を通じて環境問題について学習し、自主的・積極的に環境保全活動に取り組んでいくことが重要であり、特に、21世紀を担う子どもたちへの環境教育は極めて重要な意義を有しています。

■北九州・魚部の「今」

部員は約 150 名、全国各地（北海道・網走～沖縄・西表島）どこでも、2才児～70代まで年代問わず、県内外の生きもの好き（アマチュア）も、各分野の専門家（動物園園長、獣医、生物系（魚類、昆虫、両生爬虫類、寄生虫）、人類学、写真家、環境調査、民宿経営者・・・など）も
⇒ 何らかの関わりを持つ「場」＝魚部

■県内全域の川や池、干潟で調査。

何がいるのか？ 何がいないのか？ 毎回毎回、何らかの発見や気づき。
＝専門家も、地元も知らないことがたくさん。

■成果を社会に投げかける。

- ・展示、観察会、講演会
水環境館では約 11 年間、博物館でも 3 回、モノレール、TOTO、北九州空港・・・
etc
- ・図鑑制作＝成果を「形」に残す ⇒ 啓発と基礎資料にする

■たまには保全に関わる。

- ・県内でそこしかいない干潟のハゼ
- ・いい加減な環境アセスの高速道路
- ・商業地開発と自生地 1ヶ所の水草「デンジソウ」
- ・ホテルと人にしか興味の無い川の改修

■「北九州・魚部」おらが街の名物となる存在へ

- ・魚部はあなただけの魚部ではなく社会的にも大切なもの。
- ⇒「北九州・魚部」（まずは任意団体）＝部活動から市民のブカツへ

■ああ、ギョブとはこういうことか。

- ・知ること
⇒ 調査を通じて、自らが体験的に現状を知る

予定外の期待が前提「知ること」。

※予定外＝新たな知見の獲得

活動意欲の源

- ・ふるわない結果（マイナス）も次への源
- ・「業界」や社会はもちろん、自分にとって

でもOK

■副代表ヒストリーから魚部をみる。

高校魚部との出会い。

【中学時代】・休日は家で。友人の誘いも断る。

・父親に連れられ釣りに行く程度。でも、生きもの好き。

【高校魚部】・マニアックな同級生たちに圧倒される。

・興味はあっても手も足も出ない。種名わからない、覚えられない、現場でも見えない。

・戦力にならない＝調査活動のメンバーになれない！焦る。

環境・野外・フィールド・自然・ソーシャル～と頭にいろいろな言葉が付いたとしても・・・

⇒ ・伝えたいものはあるが、「教えたい」訳じゃないという点で、教育や学習とは言いたくない。

・それぞれが個々に感じ・知るのに委ねたい。

・伝える側の技術向上も、それが狙いではない。

何と呼べば、じっくり来るのか？と探しているところ。

1. 図鑑見る、飼育する、標本つくりする、話聞く、現場に行く、の繰り返し

⇒ どこかのタイミングで見えてくる！

2. 種説明文の作成担当になる

⇒ 情報整理が自身の中でできて理解が進む

⇒ 好きになる、いとおしくなる、伝えたい！

大学1年生の今、生きもの好きオーラを全開に「水生昆虫伝道師」の道をまっしぐら(?)

■魚部は○○、という言葉は何だろ？

「教育」「学習」「学校」「トレーニング」「スキル」etcではじっくり来ない。

そこでの位置づけを探している訳では無い。

第3の SST

市場から人づき合いを学ぶ 「たんたんマルシェ」

命婦 恭子（西南女子短期大学部保育科）

■ SST ってなんだ？

SST Social Skills Training

- ・ ソーシャル・スキル・トレーニング
- ・ 他者とコミュニケーションするために必要な技術をソーシャルスキルと呼ぶ
- ・ 具体的なスキルを習得するためのプログラム
- ・ 様々な場面で定式化した SST を実施
- ・ 精神科リハビリの SST / 学校教育での SST

精神科リハビリの SST

- ・ 精神疾患の患者の社会復帰のためのプログラムとして発展
- ・ 退院前やデイケアなどで実施
- ・ 認知行動療法の治療プログラムの一つ
- ・ メンバー(10 人以下)のほかに、リーダーとコリーダーが参加

学校教育での SST

- ・ 精神科 SST を学校で使いやすいように変形したもの
- ・ 教師が場面やスキルを決めることが多い
- ・ 個別に実施することもある
- ・ クラス単位で実施するときには、ゲームとしてルールを設定することもある

■ たんたんマルシェとは

- ・ 且過市場「大學堂」で実施
- ・ 2014 年 11 月スタート
- ・ コミュニケーション・スキル・アップ講座と銘打つ

- ・ 親子で参加できるプログラムを準備
- ・ プログラムには昼食(大學井)が含まれる
- ・ 未就学児とその親が市場でのコミュニケーションに参加する

2014 年度実施内容

- 11/15 お茶とお茶請けのおいしい関係
- 11/29 みんなで食べて、みんなで育つ -協同育児のすすめ-
- 12/13 安全でおいしいお米を“にぎる”おにぎり講座
- 1/10 南の島の子育てに学ぶ
- 1/24 何でも食べよう！

- ・ テーマは「食」や「異文化の子育て」など

たんたんマルシェの流れ

たんたんマルシェのねらい

- ・ 等質な他者ではない、異なる他者と関わる
- ・ 異なる世代 / 異なる職業
- ・ いつもと違う方法で買い物をする
- ・ スーパーでもコンビニでもない
- ・ 会話をしないと手に入らない
- ・ いつもと違うものを食べる
- ・ 見たことない
- ・ 好きか嫌いかわからない
- たんたんマルシェのなぜ？
- ・ 「親子」参加
- ・ 親も他世代と関わる経験が不足している

- ・親も個人商店での買い物経験が少ない
- ・未就学児をターゲットにする
- ・幼児期に体験することが大切
- ・大学生になってからでは遅い
- ・ちょっと市場に来ただけで？
- ・いつもと違う何かを体験していることが大切

- ・訓練プログラム対象者の拡大 or 実践場面の提供

たんたんマルシェ 毎月第4土曜日
参加者募集中！

親の行動の変化

- ・子どもと離れて買い物できるようになった
- ・親の行動の変化
- ・子どもの遊びへの介入が減った

子どもの行動の変化

- ・子どもと商店主とのコミュニケーション
- ・従来の SST とたんたんマルシェ
- ・市場から人づき合いを学ぶ

■従来の SST とたんたんマルシェの比較

状況的学習が可能な場「市場」

- ・市場には様々な人とモノが集まる
- ・安定したコミュニティ
- ・高いスキルを持つ大人が多数いる
- ・来訪者を受け入れる場所
- ・来訪者の主体性を引き出す場所
- ・買い物と食事は日常生活の一場面
- ・コミュニティの一員である大講堂

ソーシャルスキル習得のプロセス

- ・実社会での状況的学習により習得
 - ←疾患や特性により苦手な個人が存在
- ・守られた環境での訓練プログラムの考案
 - ←状況的学習ができる実践場面の減少
- ・全体的スキル低下

市場のテクネー 大學堂の實踐にみられるシナリオとアドリブ

木下 靖子（北九州市立大学）

1. フィールドワーカーに必要な知恵とは
ふたつの知識体系

【エピステーメ型】〈大規模な国家〉

- ・分析的・明晰的・理知的
- ・普遍妥当性がある「専門家」

【テクネー型】〈小規模な共同体〉

- ・全体論的・暗示・パーソナル的・実践（経験）的
- ・機知をはたらかせる

例) フィールドワーカー：予想外の事態に
知恵を出す、行動して事態に折り合い
をつける、臨機応変にふるまう、転ん
でもタダでは起きない失敗から発
見！

⇒フィールドではテクネー型の知恵が試
される

大学生と公共空間

【シナリオ】

社会的（他者）に設定されたストーリー
目的・到達目標がある

【アドリブ】

シナリオを逸脱する行動・行為

やってみないと結果はわからない

2. 大學堂の誕生

市場をフィールドワーク

- ・九州フィールドワーク研究会(野研)
- ・北九州市の市場調査
- ・市内に100以上
- ・市場＝生鮮食品小売店の集合体

テント芝居の手伝い

- ・東京の野外テント劇団、北九州公演
をおこなう

- ・バリダンスと芝居の誘致

- ・小屋掛けのな場の作り方

仮装行列・路上芝居・バリダンス

「大学生はなにをやるかわからん！」

- ・店主も客も高齢化が進む且過市場
- ・市場の通りまで人がやって来ない
- ・芝居のようなものが突然始まるよ
うな空間にしたい！
- ・なにをやるかわからんというところ
に賭ける
- ・満を持して・・・

空き店舗を改装 2008年大學堂オープン

3. 大學堂の活動

シナリオ①；地域貢献活動

- ・商学連携の共同事業
- ・まちおこし
- ・地域活性化に大学生が一肌脱ぐ
- ・買い物に来たひとのために、休憩
所の運営
- ・活躍する大学生ボランティア

アドリブ①；表現の場

- ・芸術は爆発だ！
- ・人の目を惹く（退く？）には、ど
うしたらいいのか
- ・やれる技は何でも試す
- ・音楽・芝居・ダンス・工作・大工
仕事・・・
- ・パフォーマンスをみがく
- ・企画力をみがく

- ・ 投げ銭
 - ・ 呼びたい芸術家を呼ぶ
 - ・ 卒論研究で手に入れたネタを披露
- シナリオ②；観光事業

- ・ 且過市場をまちおこしのために、観光スポットに。
- ・ 北九州市に来たら、且過市場へ
- ・ 且過市場は昭和レトロ
- ・ 親切な大学生がいる大農場
- ・ 名物も誕生

アドリブ②；市場的成功

- ・ 「ここは且過市場なのに、儲けんでどうするん！」
- ・ 最小限の労力で、最大限のインパクト
- ・ 観光客が絶対手に入る名物づくり
- ・ 「大学生」が付けば、けっこう売れる！？

4. フィールドと市場と大農場

「アドリブ」と「シナリオ」

- ・ たのまれてもいないが、やりたいからやる。
- ・ 内発的動機、モチベーション
- ・ 危険が伴うこともある
- ・ 失敗することもある
- ・ やれば問題ない、正しいからやりなさい、ごほうびがもらえることも。
- ・ 外発的動機、インセンティブ
- ・ 安心、安全
- ・ 失敗の排除、失敗に責任がない

「ディズニーランドでは空間イメージが厳格に管理されており、客は提供されるシナリオを嬉々として演じる。共在する他者はあらかじめ抜き取られており、そこにいる人々は皆シナリオによって支配されて

いる」(西澤 2010)

アドリブとシナリオ逆転の危機

- ・ アドリブを期待されて始めた大農場
- ・ したたかに描いたシナリオ(地域貢献・観光資源)
- ・ 油断するとシナリオに乗っ取られる
- ・ ここ10年ぐらいの世間の変化
アドリブ<シナリオ
- ・ ここ10年ぐらいの学生の変化
アドリブ<シナリオ

アドリブとシナリオ、境界のあわいを生きる

- ・ ときにシナリオに乗りつつ、したたかにアドリブをきかせる
- ・ 騙しても、騙されるな／だまされない心を鍛える

⇒シナリオを常に疑うこと

- ・ 公共空間に関わる
 - ・ 「シナリオ」と「アドリブ」
 - ・ 「消費」と「生産」

フィールドワーク力を高める

- ・ アドリブ経験の多様さ、積み重ねが「テクネー型」の知識となる。
- ・ 臨機応変、行動力のあるフィールドワーカーを育てるインキュベーション「大農場」

[参考文献]

テッサ・モーリス＝鈴木 『辺境から眺める』、2000、みすず書房
西澤晃彦 『貧者の領域』、2010、河出書房新社

野研という可能性 正統的周辺参加によるスキルからアートへ

竹川 大介（北九州市立大学 文学部）

■野研的フィールドワーク教育の原点

- ・京都大学でフィールドワークを学ぶ
- ・探検とフロンティアへのあこがれ
- ・雑誌編集で身につけた創造的な仕事
- ・フィールドで知った分業と創発の力

■京都大学の自主ゼミ

- ・制度外の定期的な学習会
学生が教員をまきこむ
- ・特定のフィールドや課題を持つ
所属学年をこえて参加する
年次をこえて継続する

- ・さまざまな自主ゼミ
- ・ポケットゼミ（制度化）

■京大探検部

- ・ルームとプラン
- ・参加メンバーとリーダー
- ・プランの提案と、ルームでの検討
- ・対等なメンバーシップ
- ・やりたい人が主体的に起案する
- ・留守本部による安全対策
- ・計画と報告
- ・山派 海派 里派

■電車でGOGO編集部

- ・マンガ「わかんない」自費出版
どるみいる出版局「あやし」
- ・月刊「電柱ファン」への参加
関西ミニコミ大賞受賞
- ・JR西日本のフリーペーパー
メディアの使い方
ムーブメントを生み出す
- ・デザイン（設計）の大切さ
- ・創造性がささえるプロの仕事

ダメ出しをくりかえす

■人類進化論 研究室

- ・石垣島でのアギヤー漁の研究
研修と研究。海人になる
- ・創発のイメージと創造性
伝統的漁法では語れない、進取的
なシステム

個々の分業部署が独自に試行錯誤をこなし、それが全体に接続されるとき想定外の技術革新が起こる

- ・フィールドから人生を学ぶ
しかられながら覚える
- ・ゼミで朝まで議論をする
- ・「おもしろい」

■野研的フィールドワーク教育の誕生

- ・1996年北九州市立大学に赴任
- ・教員を巻き込み学部学年をこえた自由なゼミ
- ・研究のためのサロン：書を読んで野に出る
- ・調査で得られた人的ネットワークの活用
フィールドから発見する
- ・歩いて、見て、聞いて、それを伝える
- ・経験から人づきあいを学ぶ
ソーシャルスキルを磨く
- ・研究の料理のメタファー
素材を探し調理し人に食べてもらう
野で自分で手に入れた素材：一次事例
料理法と組合せ：分析・考察

- 試食会：ゼミ・論文検討会
- おいしく食べられる料理を創る
- ・フィールドとの関わりは一生続く
- ふたつの人生を生きる
- ・「おもしろさ」を伝える
- 正統的な周辺参加
- ・ 模倣から始まる職人の世界
- アギヤー漁・雑誌編集会議
- ・ 徒弟制度・門前の小僧
- 悪い時だけしかる・教えない
- その道のプロの技を見て盗む
- ・ テキストやマニュアルと対極
- ・ ダメだしされても挫けない
- 「やらされた」という逃げ道をふさぐ。やるまでまつ。
- ・ 批判と試行錯誤
- 探検部ルーム・人類学ゼミ
- さまざまな事態を想定し案を出す
- イメージトレーニング
- 異論やイレギュラーを楽しむ余裕
- ネットワーク型の集まり
- ・ まわりをまきこめ
- ひとりでやろうとしてはいけない
- みんなでやろうとしてもいけない
- やりたいひとでやる
- 最小の人数から最大の創造を
- ・ 才能のある人の力を借りる才能
- 野研に入った瞬間に、新人は
- 多くの才能を手に入れる
- ・ 新人をリーダーにする
- リーダーを軸に少人数の
- プロジェクトを立ち上げる
- 互酬性と対等性
- ・ ひとりでもおどれ
- だれもついて来なければ自分です
- いいだしっぺが最後まで責任を持つ
- ・ ボランティア意識をなくす

- 「してあげる」上から目線ではない
- 「させてもらう」下から目線でもない
- ・ プロの意識：依頼者との対等性
- 仕事としての責任を意識する
- 学生という身分に甘えない
- ・ 時間を通貨にした互酬性
- わたしのために時間を使ってくれた
- 人のために、わたしの時間を使う
- 場の重要性
- ・ 場を創るところから始める
- 組織の枠組みではなく場が重要
- ネットワークの結節点
- ・ ヒエラルキー型組織ではできない
- 組織どうしではなく個と個の関係
- 相手と対等直接的な関係を結ぶ
- ・ フリーライダー問題
- メンバーであることが目的でなく
- なにかをするためにそこにいる
- ・ 参加は、義務ではなく権利である
- 教員も参加者のひとりである
- 個人の才能の発掘と創造性の創発
- ・ incentive ではなく motivation
- 外発的動機づけと内発的動機づけ
- 単位や金銭など報酬を目的にしない
- いわゆるボランティアやカリキュラムでは創造性は生まれない
- 好奇心と面白がり
- ・ 教員の仕事はプロデュースである
- 個人の才能を引き出し、
- デビューする舞台を用意する
- ・ 才能の組合せ
- 個々の才能の組合せから創発される、
- 創造性の「妙」
- 予想外の展開を楽しむ
- グローバル人材ではなくローカル人間に

わたしたちはひとりひとりが自分の人生の主人公。コンクリートや丸太のような材料ではありません、うれしければ喜び、悲しければ涙も流す生きた人間です。

だからグローバル「人材」よりも、ローカル「人間」になろう。

わたしたちの武器は、資格ではなく地に足がついた生活力です。ボランティアでも地域活性化のためでも、ましてや就活面接のネタづくりのためでもなく、自分の興味に従い、世界と誠実に向き合い、知を愛するがゆえに、時には疑い、時には批判しながら宇宙の真理を探究します。

わたしたちは学問の府である大学という場所で、本当に大学らしい創造的な研究活動を実現するために、真面目に一生懸命とりくんでいます。

■野研的フィールドワーク教育の実績

- ・地域における研究の拠点となる
- ・社会調査の委託を受ける母体
- ・資産であるネットワークを広げる
- ・研究成果を還元し事業を展開する

■スター★ドーム「きみだけのそら」2004-

- ・スタードームの開発とワークショップの開催
- ・最小の素材から最大の空間を創造する
- ・公開技術として普及している

■水族館劇場

北九州制作団 2004-2009

- ・「月と篝火と獣たち」
- ・テントに1ヶ月泊まり込み、芝居の公演をサポート
- ・学生が役者として入団。数年間にわたる交流

■フツナ島プトンギプロジェクト

JICA 草の根協力事業 2007-2010

- ・バヌアツ共和国フツナ島の村落開発事業
- ・伝統的な食品を商品化し首都で販売するシステムを作る
- ・人類学者が主体の国際協力

■北九州市場大学 市場調査 2001-2006

- ・市内に多数残る市場の調査
- ・公開講座の主催
- ・市場でバリダンス
- ・市場でお芝居「さすらい姉妹」
- ・大北九州市場学会設立へ

■石西礁湖サンゴ礁自然再生事業 2006-2010

- ・環境省からの委託調査
- ・持続可能な漁業・観光利用調査
- ・石西礁湖におけるサンゴ礁生態系保全のための統合的環境管理に関する社会調査
- ・数人のメンバーで1ヶ月以上滞在

■大學堂 2008-

- ・旦過市場の真中に店を作る
- ・街の縁台=野人のトラップ
- ・大學井 将棋処香車 合格イモ
- ・数多くのイベントを企画
- ・小倉の国際的な観光拠点へ

■SAGA12 2009/11/14-15

- ・「ボクたち森人類」
- ・野生動物への支援を通じて豊かな森を考える
- ・到津の森公園（動物園）とのコラボレーション

■アジアをあじわう 2012/5/31 7/18

- ・北九州市立大学・名古屋市立大学・東北大学・愛知県立大学・京都大学の教員と学生たちによる合同フィールドワーク

- ・調査成果のシンポジウム
- ・「アジあじシンポ」
- 屋根裏博物館 空間の力 2010 -
 - ・九州大学・九州工業大学・北九大環境工学部の学生とコラボし大講堂2階をリノベ
 - ・街中における公共空間の意味に関するシンポジウムを開催
 - ・自由な表現の場・ギャラリー
- 放課後みつばち倶楽部 2012-
 - ・環境教育として大学の屋上でニホンミツバチを飼育
 - ・北九州市近隣の個人養蜂家の調査を行う
 - ・大講堂にてハチミツの販売
- 能登・上黒丸アートプロジェクト 2014-
 - ・金沢美術工芸大学と北海道教育大学とコラボ
 - ・能登半島の限界集落、上黒丸地区でのフィールドワークと作品の制作
 - ・2017年の能登AFにむけて
- 学生たちの研究活動
 - ・こうした活動をとおして自分のフィールドを探す
 - ・そこで得た一次データをもとに論文を書く
 - ・学生たちをデビューさせる
- 野研的フィールドワーク教育の可能性
 - ・批判と試行錯誤
 - 与えられた体験学習では不十分
 - 想定外の失敗こそが学びの場である
 - ・状況論的な臨機応変
 - シナリオ化が進む社会・教員・学生状況よりも制度に依存しアドリブに弱い
- 単位や就職などの目的にしない
- ・柔軟性のあるニッチ戦略
 - 制度の周辺には必ず隙間がある
 - メディアや制度は利用するが利用されない
 - ウィンウィンの関係
 - スキルからアートへ
- ・常識を疑うこと壊すこと
 - フィールドワーク教育とは、常識や社会技能を学ぶ場にとどまらずむしろ常識や社会技能を疑い壊す試みを目指すべきではないか
- ・個人の能力の創発による創造性
 - 個人の能力を引き出しそれを組み合わせる
 - 学生たちのセンスとスキルを磨く
- ・アートにノウハウはない
 - だれでもできるちゅうのんはおもろくないな
 - だれもしてへんちゅうんがおもろいんやで